山 593-1994・10・20

第593号 平成6年10月20日発行(毎月20日発行)
昭和49年8月31日 第三種郵便物認可

大勢の協力で素敵に変身
ルームのリフォーム

リフォーム委員会　中川　武

明るく広々とした大集会室（壁面は各委員会のロッカー）

■十六年目のリフォーム

一九九二年に、ルームのクーラーの具合が悪くなった。新しいものに変えようということになり、九三年度の予算に計上したが、周りとのバランスを考えるとクーラーだけの問題ではないようで、ルーム全体を考えることになった。

振り返ってみると、一九七八年（昭和五十三年）一月、湯島にあった賃貸のルームから、自前のこのルームに移ってきて十六年の月日が経っていた。その間ほとんど改装を施していない。壁は黒ずみ、段ボール箱がそこここに積み上げられている。このあたりで大改装をしようという話になった。そこで理事会に諮り、リフォーム委員会をつくって具体化することになった。

日本山岳会のすごいところは、その道の専門家がたくさん存在することである。ルームのリフォームともなると、普通だったら管理するだけで多額の費用がかかるところだが、多くの会員が全くのボランティアで協力してくれた。私は改装に関しては門外漢で何も分からないから、その人たちの意見を聞きながらやることになった。

■飽和状態だったルーム

一九七八年当時、会員数は三千四百名、ルームもゆったりと使え、何の不便もなかった。しかし十六年後の今日、会員数五千三百名を数え、一日に三〜四つの会合が持たれることも珍しくない。本来なら使ってはならない図書室や談話室も会合の場所として使われるようになり、本を読みにきた人や、気軽にルームにきて談話を楽しみたい人たちは、隅に追いやられてしまう。委員会活動が活発になってきたこともあるが、同好会が増えたことも、ルーム

1994年（平成6年）
10月号（No. 593）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

ルームのリフォーム……1
リフォームの経費について……3
マカルー東稜に挑む（第2報）…3
マカルー隊荷梱包支援のお願い…4
海外の山……4
報告
　平成6年度自然保護全国集会…5
　八ヶ岳写真撮影会……6
　記念事業募金目標額を審議……6
　上高地インタープリターの報告7
東西南北
　アルバータ山のピッケル……8
　エーデルワイスを訪ねて……8
　短歌・風の声聴く……9
　詩・熊岩（長次郎雪渓）……10
　ウエストンが磯野計蔵に贈った「アルプス一登山と探検」……10
　山と自然の断章(10)……11
自然保護随想……9
山と医療……11
図書紹介……12
　『森を楽しむ』『カナディアンロッキー・ハイキング案内』他
書籍受入報告……13
INFORMATION……14
会務報告……14
住所変更……15

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日　10〜20時
水・金曜日　13〜20時
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日
13〜20時

を狭く感じさせる原因だろう。

総務委員会が主催する新入会員のためのオリエンテーションは年二回に分けても五十名以上になり、そのたびに他の会場を借りなければならない。懇親会はルームで行うので、歩いて戻ることになる。もうこれ以上我慢ができないくらいルームの面積は飽和状態になっていた。郊外のどこかに倉庫とミーティングルームを借りよう、と真剣に討議もされていた。

あらゆる観点からみて、できるだけ速やかにルームをリフォームして使いやすくしなければ、会の活動に支障をきたすことが、誰の目にも理解できた。

たまたまぴったりのタイミングで、同じフロアの一〇四号室が空き、今年五月に借りることができた。面積的には約二倍の広さを使えるようになったのである。肝心の資金面は、日本山岳会の諸先輩がこうした状況を見越して、ずっと以前から長期準備積立金という形でコツコツと蓄えてくれていた。

メンバーが増えてルームが手狭になった。それを是正するために手を打った。これが会員の力と協力でできたということは、日本山岳会がいろいろな意味で力をつけてきた証拠なのだろう。

■コンセプトは余裕のある憩いの空間

四月十二日、リフォーム委員会が開かれて、基本構想を練った。基本図面を作り、施工業者を集めて見積もりを取り、業者を一社に絞りこんだ。委員会としては、七月中旬から夏休み中に工事を行い、九月には完成したかった。五～六月にかけてレイアウトを見直し、各所の素材と色を決め、マンション管理組合との折衝を行うなど、目まぐるしく動いた。

多少の違いはあったが、何とか決められた期間内に思うとおりのものができあがった。

リフォームするに当たって、まずコンセプトを煮詰めなければならない。いろいろ議論した末、余裕のある憩いの空間を作るということになった。あまりビジネスライクにならないよう温かみを持たせるとともに、日本山岳会ならではの伝統と落ち着きを持ったものにしようというのである。できあがってみて、果たしてそのとおりになっているか、会員の皆様方の感想を聞きたいと思っている。

リフォームするに当たって主だった留意点は以下の通りである。

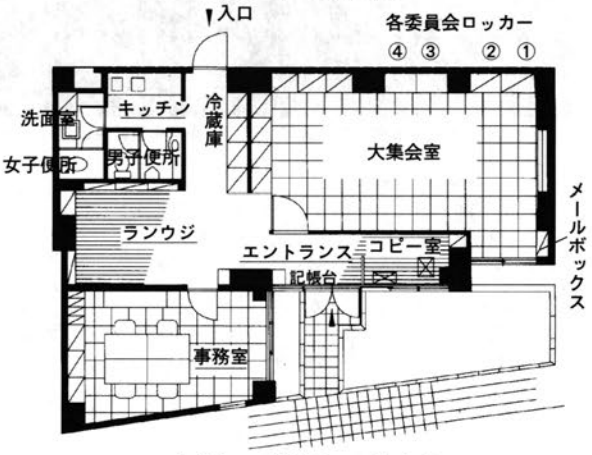
1 収納スペースを増やす
2 冷暖房機器は高性能のものにする
3 トイレ周りを拡充する
4 将来を見越して事務室を広げる
5 ラウンジを充実させる
6 コピー機、印刷機を独立させる
7 映像関係の拡充

■新装なったルーム

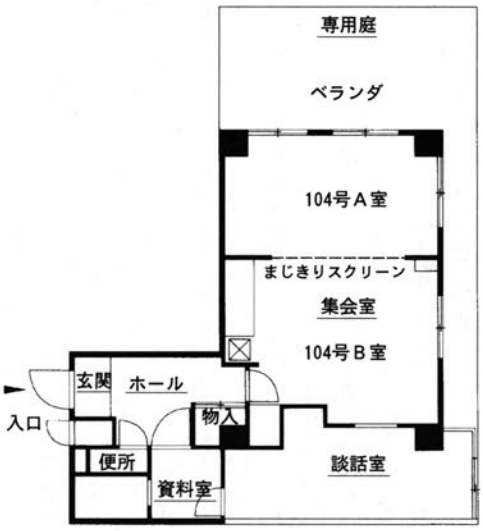
リフォームを終わって、概ね当初の思いどおりにできたと自負している。収納スペースは、各委員会に限っていえば以前の三倍に増えたし、事務関係のスペースも十分にある。今までフロアに段ボール箱で積んであったものが、すべてロッカーに納まっている。クーラーは天井はめ込み式だから、四方から強力な冷暖房の風が出てくる。トイレは女性用に洗面台を設けたり、男性用に大小別々に独立して便器を設けた。事務所は以前の談話室の場所に移すことによってスペースを広げ、四人まで事務ができるようになった。

ラウンジはルームの遊びの空間である。資料関係の展示もかねて山岳会の顔的存在になったと思う。コピー、印刷機を独立した空間に移して作業をしやすくした。映像は正面の壁の天井からボタン一つでスクリーンが下りてくるようになっている。ミーティングルームの入り口側の棚には、ワイドなテレビがビデオ機器、音響機器と一緒に納められている。世界中のビデオテー

◆ルーム平面図◆



◆新たに借りた104号室◆



プが見られるビデオ機器、ルームでマイクが使えるアンプも一緒だ。照明は今回の施工業者がヤマギワリビナだったので、一番の得意分野だ。明るいし、雰囲気も上々だと思う。

■いつまでも快適に使ってほしい

今回のリフォームには、昨年の山岳研究所改築に活躍したメンバーが、その時のノウハウを駆使して、全くのボランティアに徹して全面的に協力してくれた。

リフォームに当たってはサンビューハイツ管理組合の理事会の許可を取らないと工事を始められないのだが、長年にわたり騒音問題などで迷惑をかけてきたためか、かなり厳しい条件を出され、工事の施工開始が一週間延びるという経緯があった。

そのためばかりでもないが、他の居住者に対して迷惑をかけないようにルームは静かに使いたい。とくに二十一時以降の遅い時間にはくれぐれも気をつけたい。

ルームはリフォームされてきれいになった。一〇四号室が増えて広くなった。会員が活動するための条件はそろった。あとは使う会員各位の意識の問題だと思う。皆が快適に使うために、「大切に」「きれいに」「汚さないように」しよう、ということである。

ぜひとも会の財産を長持ちさせ、メンバーがいつでも楽しく過ごせる場所として、注意深く使っていただきたい。

最後にリフォーム中不便だったにもかかわらず、我慢をしてくれた会員の方々に感謝します。ありがとうございました。

記念の品も飾られたラウンジ

リフォームの経費について

小倉茂暉

ルームのリフォームにあたり、リフォーム委員会を中川総務担当理事の下に、建築、内装の専門家の会員五名にお願いした。

内部の基本レイアウト、リフォーム費用の算定について、できるだけ費用をかけず、なおかつ日本山岳会本部ルームとして、海外の岳人、著名人が訪問されても恥ずかしくないルームにするという、全く矛盾する要求を見事に果たしてくれた。

施工業者のヤマギワリビナは、リフォーム見積もりを当初二千四百五十万円と算定したが、交渉の結果、消費税込みで二千万円で引き受けてくれた。

一〇四号室が突然リースに出たこと、リース料の交渉、リフォームの基本レイアウト、業者選定と、その都度理事会の承認はいただいたが、平成六年度予算の編成には間に合わず、総会では一〇四号室のリース料、リフォーム費用が予算からはもれ、口頭での説明になってしまった。会員の皆様には大変申し訳なく思っている。

次回平成六年度の通常総会における決算報告で、明らかにしたいと考えています。

マカルー東稜に挑む（第二報）

日本山岳会マカルー登山隊一九九五

重廣恒夫

隊員紹介(1)

これまでに決定をみた隊員六名について紹介します。以下次号に続きます。

◆総隊長・藤平正夫 '53アンナプルナⅣ峰、'58チョゴリザ（登頂）

◆隊長・重廣恒夫 '73エベレスト、'76ナンダデヴィ東峰（登頂）、'77K2（登頂）、'79ラトックⅠ峰（初登頂）、'80チョモランマ（登頂）、'84カンチェンジュンガ南峰～中央峰～縦走、'85マッシャーブルム（初登攀）、'87ブロードピーク（登頂）、'88チョモランマ、'90ナムチャバルワ、'92ナムチャバルワ

◆登攀隊長・山本宗彦 '82ボゴタⅡ（初登頂）、'83レーニン（登頂）、'83コミュニズム（登頂）、'84カンチェンジュンガ、'85マッシャーブルム（初登攀）、'85ブロードピーク（登頂）、'87ラカポシ（登頂）、'88チョモランマ（登頂）

◆隊員・渡邊雄二 '78マッキンレリー、'84インドCB31（登頂）、'88サガルマータ、'90ムーシュ・ムズターグ（中国崑崙）（初登頂）、'92パミール・コルジェネスカヤ峰（登頂）、

'92コミュニズムC峰

◆**隊員・馬場博行**　'72キャリオルン、'74ヌンプール、'77ドルジェラクバ、'80クスムカン（登頂）、'83カングル（登頂）、'85マカルー、'88チョモランマ、'88ヒムルン・ヒマール、'92チョー・オユー（登頂）、'92シシャパンマ

◆**隊員・山本　篤**　'87ラカポシ、'88チョモランマ、'88シシャパンマ（登頂）'88チョー・オユー（登頂）、'89サガルマータ（登頂）、'91ナムチャバルワ、'92ナムチャバルワ（初登頂）

マカルー登山隊
隊荷梱包作業支援のお願い

日本山岳会九十周年記念行事として行われる「マカルー登山隊」は、隊員の陣容もほぼ決まり、各種作業を進めています。登山に要する約七千キロの隊荷の梱包作業は、十月中旬より、十一月中旬にかけて都内の日通倉庫で行う予定です。

つきましては、期間内の梱包作業のご支援を会員の皆様方にお願い申し上げます。なお、交通費、食費は支給させていただきますので、お友達をお誘い合わせの上、ご参加ください。

連絡先　登山隊事務局
TEL　〇三ー三二四九ー五一八六
FAX　〇三ー三二四九ー五二一六

海外の山

ボニントンの「小さな山」

江本嘉伸

九一年十一月、HAT－Jが主催した山岳環境国際シンポジウムに多くの著名な登山家があつまったなかで、イギリスのクリス・ボニントンのことが印象的だった。

「東京会議」に次いで「富山会議」に出席した彼は、「とにかく山に行きたいんだ」と、自分の講演を終えるやいなや、立山のスピード登山に繰り出したのだ。

この九月、群馬岳連のサガルマータ南西壁冬期登頂を祝うプログラムで講演するため来日した際も、前橋での講演のあと、谷川岳へ岩登りに行くことを実に率直に楽しみにしていた。自然と未知の世界が好きでたまらない、というボニントンとのインタビュー内容はHAT－Jの「会報」で書いたのでここではふれないが、その「小さな登山」については、是非紹介しておきたい。

ボニントンの近著「Sea、Ice、& Rock」を読むと、彼の志向する世界が見える気がする。

六八年に世界で始めて無寄港単独世界一周を果たした英国の有名なヨット冒険家、ロビン・ノックス・ジョンストンとの共著であるこの本は、九一年夏、ヨット「スハイリ号」で、ボニントンたちがグリーンランドまで航海登山をした時の紀行文である。

ノックス・ジョンストンが操舵するスハイリ号は、グリーンランド東岸のカンゲルドルグサック・フィヨルドを、氷山を目の当たりにしながら内陸部に進み、小さな入江に接岸。ここから、氷河をスキーで荷運びしながら四つのテントを出してレモン・マウンテンズと呼ばれる山城にはいり、カシードラル峰（二、三〇〇㍍。なお、翌年、他の英国パーティーによって、ボニントンたちのめざした山は「カシードラル」ではなく「ミニスター」と呼ばれる山だ、と報告された）に挑戦したのだった。

登山そのものは、頂上手前で断念したが、切り立った壁、急峻な雪のガリーなど写真で見る限り、相当な難物であったことがうかがえる。

が、興味をひかれるのは、海洋冒険家と登山家が、互いの経験と知恵を信頼して思いつき、実行にこぎつけた、極北の地での「海と山の冒険」の発想である。

前号のこの欄で、「ヒマラヤ五十歳時代」について書いたが、ボニントンの情熱は、その傾向とはむしろ正反対の方向に向かっている。

「小さくとも、とにかく人の踏み入れていない場所に強くひかれる」と、彼は強調するが、実際、九三年のインド・キンナウル山城はじめ、“無名の山々”が、今年還暦を迎えたこの英国の希有な登山家の心をとらえているようである。

ボニントンについては、八五年、フランスの雑誌「VERTICAL」が企画したヨーロッパのトップ・クライマーたちの座談会で「商業主義に自分を売ったイギリス唯一の男」と、ダグ・スコットが辛らつな発言をしたことがある。七五年、ボニントンの指揮下で、サガルマータ南西壁を初登攀したスコットは、ある時期からボニントンのやり方に懐疑的になったらしい。

しかし、湖水地方の環境保護活動も精力的に進めるこの登山家が本気でパイオニア・ワークをやろうとしていることは確かである。

REPORT 報告 REPORT

平成六年度自然保護全国集会
南アの麓で山の自然保護を語る

自然保護委員会

恒例の日本山岳会の自然保護全国集会は、去る九月十七～十八日の両日にわたって、南アルプスの麓、山梨県早川町の「ヘルシー美里」で開催された。

当日は折からの台風二十四号の余波の激しい風雨のため、予定された観察山行も、早川町の好意による「野鳥の森」でのバードウオッチングも中止されたが、全国から五十四名の会員、十一支部（ほかに三支部ミニコミ紙上参加）によって「山の自然保護を考える」のテーマのもと真剣な討議が行われた。

集会前日は風雨の中、身延駅に参集した会員は日蓮宗の総本山久遠寺に参詣したのち、山行中止、会議場に直行した。その後、一部は風雨をついて早川最奥・秘境奈良田の「白籏史朗記念館」を見学した。

外の風雨にもめげず熱心に討議する会員

■町おこしに熱心な早川町

会場となったヘルシー美里は、過疎となって廃校した中学校の旧校舎を利用したもので、なつかしさとともにまことに温みあるものであった。

十七日、夜六時から、篠崎会員司会のもとに懇親会が開催された。開会に先だって国見実行委員長と辻早川町長、地元山梨の古屋支部長のそれぞれの挨拶と、参加支部・一般会員の紹介が行われたが、中でも過疎化に悩む辻一幸早川町長の町おこしに対する前向きな話は聴衆者に深い感銘を与えた。

早川町は町を縦断する〝母なる川〟早川のある南アルプスの山懐に深く抱かれた自然豊かな町である。昭和三十一年、旧六カ村を合併して発足し、最盛時八千人だった人口は今では二千三百人しかいない。それは、かつては自然が厳しくかつ重く生活にのしかかってきたからだが、今はそれを逆に恵みとし、町外からの新しい風も吹き込み、野鳥の森、川を考える会、白籏史朗の大いなる南アの写真館、焼畑文化の紹介などを先頭に積極的に自然を活用し、それに肉付けしながら魅力ある新しい町づくりを進めているという。

南アルプスの山懐の深い夜は全国から集まった自然を愛する人々の歓談のうちに、別室「クヌギ」で行われた二次会へと続き盛り上がった。

■台風の中でも活発に討議

翌十八日、自然保護全国集会の本番は、午前九時から松本委員の司会のもとに開催された。

まず、記念撮影。ついで藤平正夫会長欠席のため代理として大森弘一郎自然保護担当常務理事が「自然保護は幅が広く難しいが、とにかくやることであり、実りある一日でありたい」との挨拶を行いスタートした。しかし天候不順で帰路の心配もあり、予定を大幅に短縮、議事は大体午前中に終わらせることとした。それによれば、まず中止になった野鳥観察に代わって、川口仁氏による地元早川町の自然についての話、ついで岳連の前嶋信氏による富士山の話、そして山梨岳連の内藤進氏の南アルプスを中心とした話のあと、各支部よりの現況報告というスケジュールとなった。

川口氏の話の概要は①山梨県南西部に広がる早川町の地理的な自然　②町活性化の拠点、八十九種の野鳥を観察できる野鳥公園の開設　③発電ダムによる早川の渇水から「水を蘇らせる」運動についてのまことに有意義なものであった。

ついで岳連の前嶋氏は、「日本人の心のふるさと」富士山を世界遺産にする運動の経過について報告した。それによれば連絡協議会を中心に山梨県の八団体が協力して運動を進め、マスコミ支援のもと、二百三十万人にのぼる署名活動、とかく引っ込み思案の行政への要望など、精力的に運動を行っているという。そのあと山梨支部の内藤

氏は南アルプスの現況について次のように語った。アンケート調査をみると、南アルプスは登山者の質的変化（未組織、中高年登山者の増加）とともに一つの大きな変化の時期にきている。ゴミの持ち帰りはかなり徹底したが、登山者の増加で、とくにトイレの問題がおきている。また、南アルプスを守るため、植生・土壌・雨水（酸性雨）調査など基礎データを集める作業もしている一方、登山道幅の拡大に伴う高山植物の保護、またキタダケソウの種の保存について近々立ち入り禁止のエリアの設定も行うことになっている。

■各支部は地域の問題点を報告

支部報告は次の十一支部が行った。

●山形支部（佐藤淳志会員）

鳥海山のイヌワシについて、百二十日間の調査を行ったが、営巣地は未確認である。しかしこれによって開発側に大きなインパクトを与えたことは確かである。

●越後支部（石田国夫会員）

苗場山の小松原湿原を中心にトイレ対策や植物盗掘防止に努めている。

●信濃支部（中野和郎・植松晃岳会員）

長野県で憂慮すべきことは「国営アルプスあづみの公園」の活発化（資料）とオリンピック関連の自然破壊の問題である。（資料）その他種々の問題もあり、その対策に苦慮している。

●山梨支部（前述）

●東海支部（岡田晋会員）

支部友制度を利用して自然保護の啓蒙に努めている。

●京都支部（塚本珪一会員）

北山で問題になっているのは林道である。月一回程度勉強会を行っており、先般も「林業家からみた自然保護」という話を聞いた。

●富山支部（太田昭・石坂久忠会員）

有峰のヒメシャクナゲの保護手法の模索と立山カルデラ開発の問題の二つがある。

●山陰支部（小西毅会員）

全県公園化構想が打ち出され第一歩を踏み出した。これについていかに対処すべきか検討中。大山の一木一石運動は継続中である。

●福岡支部（中山健会員）

マウンテンバイクやオフロード車の問題に頭を悩ませている。

●東九州支部（甲斐良治会員）

九重山を中心に道路の整備、清掃などを行っている。

●関西支部（斧田一陽会員）

蘇武岳、氷ノ山のブナの保護に力を入れている。

なお、岩手、福井、熊本の三支部はミニコミ紙「木の目草の芽」を通して紙上参加をした。

一般の部として若林和司会員から上高地自然保護解説員、林田正幹会員からはHATーJの話があり、最後に大島の自然を守る会より贈られた「愛宕山賛歌」のテープが会場に流され、種々問題を残しながらも、盛会裡に閉幕した。（写真・**市川義輝**、文・**小倉厚**）

八ヶ岳写真撮影会
早朝の景観をカメラに
フィルムビデオ委員会

フォトビデオクラブとの共催で、六月二十五日～二十六日、黒百合ヒュッテ周辺で写真撮影会が催された。

参加者は列車やマイカー利用で、渋ノ湯や唐沢鉱泉経由、麦草峠経由など、思い思いのコースで三々五々黒百合ヒュッテに集まってきた。十八名の参加者は酒とつまみを中心に車座になり、食事までの一時を写真談義に花を咲かせた。

二十三日は開山祭にあたる木魂祭。その関係者やNHKのテレビ取材班も同宿して、小屋は大変な賑わいであった。

就寝し、ウトウトしかけた夜の九時頃、山岳会旗を携えて山口理事と石田会員が小屋に到着した。昼間でも滑りやすい露岩と丸太の登山道を、ライトを照らしながら登ってきて、旗を届けてくださったお二人に、心からお礼申し上げます。

翌朝四時に起き、中山峠の展望台へと向かう。赤から紫へ刻々と移りゆく奥秩父の峰々、黄色から緑へと変身してゆく天狗の双耳峰、梅雨の合間に見せた素晴らしい景観を写真におさめて小屋に戻った。

朝食後、小屋の前で記念撮影をし、解散となった。仕事の関係などでそのまま下山する人、天狗岳へと縦走する健脚組、白駒方面へと向かう人など、山岳会ならではの撮影山行であった。

最後に、何かとご便宜くださった黒百合ヒュッテの米川氏にお礼を申しあげます。

（**北村義男**）

記念事業
募金目標額などを審議
マカルー峰九十周年合同募金委員会

九月十二日午後六時から日本山岳会会議室で、藤平正夫会長他十五名が出席して標記の委員会が開催された。

募金は「会員対象」と「企業対象」（マカルー峰登山）に分けて行い、募金目標額は前者は千五百万円、後者は三千万円。九十周年記念事業（マカルー峰東稜登山隊派遣、記念式典、百年史編纂・データバンク事業など）を成功させるために、会員の皆様方のご協力、ご支援をお願いいたします。なお、この募金については免税措置が受けられます。

上高地インタープリターの報告

初の試みは好評!!

自然保護専門委員会

山研委員会のご協力で、八月一日から三十一日までの一カ月間、地球環境基金の助成で行っている「山の自然学講座」で勉強した新米のインタープリター（自然の声を人間の言葉に翻訳する人）たち六名が、交替で上高地山研に詰めて、実際のインタープリター体験をさせていただいた。

本人たちも随分緊張し、それぞれ勉強と工夫を凝らして一生懸命にやってくれた。この「自然の声を語り、自然保護の重要性を感じとってもらう」作業が、どの程度うまくいったかを知っていただくために、対象者からのアンケートを掲載させていただく。

森の中で解説するインタープリター

対象者は、山研宿泊客から七十七人、外部の人十八人。「案内をしているうちに、いつの間にかお客さんが増えていたよ」という愉快なこともあったようで、一般の人にも魅力のある企画であったことを伺わせてくれる。

アンケートの回収枚数は四十四枚、その中で評価をお願いした四つの項目の集計結果は以下のとおりであった。

	◎	△	×
熱意	43	0	0
知識	35	8	0
解説の仕方	33	10	0
態度	39	4	0

なお、宿泊客のない日には、四カ国語の自然保護パンフレットを約百部ずつ、案内人組合、遭難対策本部や岳沢小屋、涸沢ヒュッテなど三十箇所に配って歩いている。

初めての試みであったが、山研委員会からもまずよかったとの評価と、来年はもっと拡充しようとの意見をいただいた。我々もいっそう勉強してご期待に添いたいと思っている。

来年はさらに多くの方々のご参加をお待ちいたします。

■アンケートから

A氏（品川区／会員）素晴らしい企画ありがとうございます。来年のトライアルをますます発展され、JACの活動に厚みと奥行きを作ってください。

B氏（杉並区／会員）山研ではありがとうございました。山研のためにも、今後とも頑張ってください。

C氏（南埼玉郡）解説が小生を含めたグループのほか、周囲の多くの方々にもおよび、喜ばれていたことが印象的。

D氏（藤枝市）大変お世話になりました。このような活動をしている方がいることを初めて知りました。私も何かボランティア活動ができたらと思う。

E氏（富士宮市）山研の家族的な雰囲気が大変よかった。解説員の知識の多いのに感心しました。

F氏（富士市）分かりやすい説明であり、上高地を観光という目から、改めて大切な自然地であると認識した。もっと自然保護のPRをして、入山者にパンフレットなどで徹底しては……。

G氏（豊川市）ていねい、親切、知識豊富な解説に感動しました。もう一度説明を受けながら上高地を散策できたら最高に幸せです。ありがとう。

Hさん（横浜市／女性のインタープリターに）真摯な対応で質問に答えてくれる優しさに感謝しています。美しい流れの中のバイカモ（梅花藻）の説明も、花の咲く様まで教えてくれた。そして白い石の散り敷く場所では二億年前の海の中の堆積岩であった黒い石のことなど……黒い石を手にとって眺め、太古の昔を考えました。上高地も海の中だったか……と。花もたくさん咲いていて説明も大変だったでしょうが、いやな顔もせずにガヤガヤ賑やかなグループと付き合ってくださった。八十歳に手の届く老人が、歩けなくなったときには山研まで走り、お世話様でした。またお会いしたいですね。

I氏（長野県）上高地の自然の大切さをよく分かるように説明していただき、孫らの一生の思い出になりました。今後も続けてください。祖父一、母親二、小学生三の六人の旅でした。

Jさん（太田区）上高地には何回か行き、大正池梓川周辺を散策しておりましたが、今回こそ有意義に、興味深く上高地を知ることができた。植物、地質、生物等、驚くほどの知識をお持ちの畑中さん、お世話になりました。また孫を連れて上高地へ行く予定です。

なお、初めてインタープリターを体験した六人が、毎日つけていた日誌から、今後への「役立つ」マニュアルを作った。苦労と経験の中身が参考になると思うので、次号で紹介したい。

（大森弘一郎）

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。

カット　中村あや

アルバータ山のピッケル マザマス山岳会のエアーズ氏のこと

藤平正夫

去る七月十五日から二十日まで、マザマス（岩山羊の意）山岳会の百周年式典に招待されて、アメリカのオレゴン州に行ってきた。これはJACの仕事ではなく、富山岳連の行事である。マザマスはフッド山（三四八〇メートル）を中心とするアメリカで二番目に古い山岳会で、富山県山岳連盟と友好関係にある。

式典のことは日山協の「登山月報」で報告するが、ここでは私が式典のスピーチのなかで取り上げた、アルバータ山のピッケルとマザマス山岳会の会員F・D・エアーズ氏のことを書く。

アルバータ山は一九二五年に槇さん一行によって初登されているが、第二登はエアーズ氏とJ・オバーリン氏の二人が果たしている。そのとき、頂上に残された槇さん一行のピッケルを持ち帰り、AACの山岳博物館に納めた。両氏と文通をしていた三田幸夫会員は、第二登を祝って鉈を贈ったが、その返礼としてピッケルの模型が日本山岳会に贈られてきた。銀のピッケルという伝説だったが、手紙によれば、スチールだった。しかし模型はその伝説にちなんで銀メッキしたという。シャフトには両氏のサインがあり、本会のルームにいまも飾られている。

私はスピーチで会員エアーズ氏と日本山岳会とのつながりを話し「敗戦に打ちひしがれて、荒廃した国土にたたずみ、道徳退廃のさなかにあって、このピッケルのエピソードは、私たち登山人にとって救いの光明であった。自然と山を愛する仲間は国境を越えて結ばれていることを確信し、登山界復興のきっかけとなった。このことを日本の登山界は決して忘れないだろう」と結んだ。

通訳が大変上手だったおかげで、壇上から見ても強い反応があり、ある老人は眼を潤ませていた。日本と違って開会の挨拶とかセレモニーは一切なく、司会者はのっけからジョークで入る。私のスピーチは「堅苦しいことは抜き、ウイットを入れてくれ。五分間」ということだった。ウイットは省略するが、最前列の会長夫人が笑い転げていたことは事実である。

通訳（黒部市の研修留学生、リチャード君は三年間で日本語の読み書きをマスターし、漢字、カタカナ、平がな自由自在。もちろん富山弁も）のおかげだが、あがらず気楽に地のままでやったのがよかったようだ。

＊

●F・D・エアーズ氏

一九〇六年ー一九七〇年（六十四歳）
一九四〇年　リード大学教授（化学）
一九四四年　マザマス入会
一九六三年　フルブライト資金を受けてペルーのファマンゴ大学の客員講師（考古学、火山学）一年間。よくペルーの山を登り、初登としてペルーのサルカンテイ、ワスカラン、カナダのアルバータとなっているが、アルバータはもちろん誤り。以上はマザマスのデータバンクで索引したものだが、「山岳辞典」（昭和三十八年　山と溪谷社）によるとサルカンテイの隊員にはエアーズ氏の名前があるが、ワスカランの隊員中には見当たらない。ただし、考古学的には重要な山らしい、と載っている。

●J・オバーリン氏

一九四三年　AAC入会　終身会員
一九四七年　オピー（三三三五メートル、カナディアン・ロッキーの未登峰）に挑み、初登。
一九四八年　エアーズとアルバータの第二登。
一九五二年　サルカンテイ遠征隊参加
一九五三～五八年　AAC事務局長
一九五六～五八年　同会長
一九六〇～六二年　AACニューズの編集を担当。

（世界百科事典・山と溪谷社による）。

タンボチェの僧院とエーデルワイスを訪ねて

坂倉登喜子

ネパールのタンボチェの僧院が再建された、と聞いていたが、寄付をしたこともあって、いつか新しいゴンバを訪ねたいと思っていた。

三年前に宮原さんから夏のフラワートレッキングのお誘いを受け、素晴らしかったので、今度は皆さんにもこの

カット　宇都木慎一

短歌

風の声聴く

大橋克也

払暁の山路辿れば忽ちに
つま先濡れて夏の滲みくる

つま先から山の冷気が泌み透る
来光見んと登る草鞋に

汗するを厭う息子と登りきて
吹き抜けてゆく風の声聴く

汗するを厭う世代と荷を分かち
風吹き抜ける頂に立つ

登山帽を知らずぬぎ捨て尾根に立つ
日輪ゆがみて海に沈むよ

帽子をばぬぎ捨て何かに祈りいる
日輪海に沈みゆくとき

感激を味わってほしいと思っていた。

この夏、二十名乗りのヘリやホテルなど万端受入準備をするからということだったので、七月十六日から二十五日まで当地にでかけた。そして雨季のシャンボチェからタンボチェまで登り、立派に再建された僧院を拝観することができた。二十数年前、ランタンからガンジャラ越えした帰途、ホテルから七時間半でタンボチェ僧院を往復して以来の再訪だった。

今回は宮原さんの酸素量診断で弱い人順に班分けし、AB班は馬に乗り、CD班は歩いて登った。途中トラレンガで中継テントを張り、セクションを縮めて往復したが、登り着くと前より立派な僧院が再建されていた。寺院では鍵を開けて二階まで見せてもらい、立派な極彩色の仏像を拝観することができた。まだ入り口付近は未完成で、工事中であったが。

私はかねてJAC事務局の宮沢さんからタンボチェにもエーデルワイスが咲いているということを聞いていたので、チョルテンのある尾根を少し登ってみた。道の両側にエーデルワイスを数株みつけ、写真を撮った。タンボチェにもエーデルワイスが咲いていたことを確認することができたのである。

エベレストビューホテルは二泊で、翌日は周辺のお花畑を歩き、クムジュ

自然保護随想

伝統・文化と善意の関係

関塚貞亨

あれは四年前に静岡県三島で開かれた自然保護全国集会の分科会でのことだった。テーマは『海外登山と自然保護』で、ゴミや不用品の処理、ボランティア活動についての討論の中で、京都支部のTさんが「その国の文化や伝統に悪い影響を与えないように配慮が必要だ」と発言したことが、いまでも心に残っている。

この二、三年、エベレスト街道の清掃、ネパールの山村への植林、発電設備の据えつけ、学校建設など、善意の人々によるボランティア活動がいよいよ活発になって、これらの活動がネパールの人々の生活に、どのような影響を与え、文化や伝統との関係は、どのようになっていくのか、を考えると四年前のTさんの言葉が、私の中でどんどん大きくなってきている。

その地域の伝統と善意の行動が齟齬を生んだ例として、亡くなられたN先生のお話が印象に残っている。話はこうだ。「北アフリカから中近東の乾燥地帯に生活する遊牧民は、家畜の頭数が多いほど豊かだと考える。西欧的な考えで、この広さなら羊は十頭が適当だ。草も水も十分に食べられて、肥えて乳もいっぱい出るし、チーズもたくさんできる、と説明しても駄目だ。同じ場所で痩せて乳もろくに出ない羊を目いっぱい、例えば十五頭飼って、私は豊かだと満足している。そこで善意のボランティアが、痩せた十五頭の羊に水を十分に与え、草ももっと食べられるようにと、井戸を掘ってあげた。ところが、その遊牧民は羊を二十頭に増やした。それが彼らの文化？伝統、といえないまでも、考え方だ。そして草を食べ尽くして、砂漠が広がった」

ネパールの山村に電灯がついたために、人々が夜遅くまで起きているようになり、薪の使用量が増え、森林破壊が加速している、という話もある。

ヒマラヤに木を植える人たちもいる。カラコルムでは柳を植え、ネパールではシャクナゲを植えた、という話を聞いた。山の人が欲しがっているのは、薪になる木であろう。しかし美しい花の咲く木を、山の人たちがどのように扱うのか、興味はある。

難しい問題だが、ヒマラヤの環境保全に関する、いろいろなボランティア活動も成熟期に入り、その地域の文化や伝統との関係や影響を英知を集めて研究する時期だ、とはいえよう。

ンの学校や雪男の頭のあるお寺で写真を撮ったりして、予備の一日をゆっくり歩くことができた。

ホテル最後の夜はボーイさんたちがラブソングを歌いながらネパールダンスを踊って歓迎してくれた。私たちはコーラスで返礼し「今日の日はさようなら」を手を組み合って歌い、またいつの日にか会いましょうと別れを惜しんだ。

今回も三年前にお世話になったニマさんの、手を取り足を注意しながらの助力、宮原さんや田近支配人の心厚いもてなしで、夢のようなトレッキングができ、参加者から賛辞をいただいた。

雨季とはいえ、夕方から夕立のような雨が降るだけで、翌朝は快晴で山は輝き、エーデルワイスをはじめさまざまの花が露に濡れて生き生きと咲き競い、まさに百花繚乱の世界であった。夕立、晴れ、霧といった気象パターンの夏のネパールは、私たちだけの世界ではもったいないくらいだ。夏のネパールは雨ばかりのイメージがあるためか、人影もない緑と花の静寂郷だった。

小さな村の畑で紫色のアズマギクをブーケにしてくれた少年が、帰る日に飛行場まで見送りにきてくれたが、彼の黒光りした笑顔ときれいな眼が可愛くて、今も忘れられない。

今年のネパール花のトレッキングは花々の群落に出会い、朝日に輝く山々を仰ぎ、ネパールの人たちの人情に触れ、現地の皆さんのご協力も得て、すべてに恵まれた雲上の夢のような旅であった。

詩

熊岩（長次郎雪渓）

塔田也寿

切り立った岩のまなかを
冷たい白が天につづく
一歩一歩鋭い爪が私をささえ
一歩一歩私はそれに近づく
紺青の空の中にそれは在った
峻烈な岩壁を両袖に持つ
熊たちの壮大な舞台
小賢しい人間どもが這い登ってくるまで
そこに熊たちのドラマがあった
そして神々の拍手は
はるかに谺して雪渓を下ってゆく
いかなる神か私は知らない
ただ少なくとも　それは
熊たちの　羚羊たちの　雷鳥たちの
可憐な花たちの神々であった
そしてわれわれ人間どもは
彼らの末席に　小さく小さく座っている筈であった

来年もさんけんで会いましょう

ウエストンが磯野計蔵に贈った『日本アルプスー登山と探検』

田畑真一

昭和四十三年二月十日、故磯野計蔵（一九〇七～一九六六）の蔵書が日本山岳会に寄贈された。磯野計蔵文庫として、日本山岳会図書室内の独立した書棚に収められる内外の多数の書籍は、常時施錠されていることもあり、いわば門外不出の感がある。

ところで平成六年三月、資料調査に来室された小林郁子氏（小倉一夫編集事務所）が偶然にもウエストンの『日本アルプスー登山と探検』を調べているうちに、表紙の見返しにウエストン直筆のメモがあるのを見つけた。この知らせを受けた私は早速図書室に出向き、やはり、直筆であることを確認した。

アルパインクラブの用紙に書かれたメモには、青インクで次のようにしたためられている。

*

"57 Iverna Court London W.8.
February 1st.1935
to Keizo Isono on his marriage
from his friend the auther
Walter Weston"

*

「一九三五年二月一日、磯野計蔵の結婚にちなみ、友人の著者、ウオルター・ウエストンから」という程度の意味であり、ウエストンの住所がロンドンのアイベルナコートの五七とある。前記したアルパインクラブもサビルローの二三である。

なお、磯野計蔵は明治屋の第四代社長だった。昭和四年には関東学生山岳連盟の設立に参画した。昭和八年から九年にかけては渡欧し、アイガーなどに登頂した。この間、すでに帰英中だったウエストンとの交流が考えられるのである。

蛇足ながら、以上の事跡については島田巽氏をはじめ、川村宏、三井嘉雄、安江安宣の諸氏がまとめられた年譜（「W・ウエストン年譜その4」『山岳』第八五年）にも記事がなく、急遽報告させていただくものである。

［別記］

先人のお名前については、敬称略により、敬意を表させていただきました。

山と自然の断章(10)

岡村治信

■自然との取り組み

昭和三十二年の新緑のころ、日本三大秘境の一つといわれた南九州の五箇荘を訪れたことがある。熊本県の人吉から入って宮園から山径を辿り、九州の背梁山脈を越えて宮崎県の椎葉に出た。二晩野宿しての山旅だった。

五箇荘は平家の落人が隠れ住んだ所といわれ、五つの集落があったが、いまは大半が廃村となり、わずかに拓かれた平地も雑草の茂るにまかされ、苔むした低い石垣が残っているだけだった。まだ電灯も電話もなく、わずかに残った住人は山の急斜面にすがりつくように住み、粟や稗を常食としていた。最後の集落で見かけたたった一人の老婆は、軒下にうずくまって何か手仕事をしていたが、ふと見上げた眼は膿（うみ）と瘡（かさぶた）でほとんど塞がれ、やせ細った脚は静脈瘤の塊のようだった。

こんな人煙絶えた深山に、文化から取り残され、医療や福祉からも見放されて毎日を送る人たちの生活の辛苦は、われわれの想像を絶するものがあろう。彼らは、自分たちの生活を絶えず虐げ鞭打ちながらも、生命を支えてくれる自然というものを、いったいどのように受け止めているのであろうか。万事都合のよい都会生活に慣れ、時に休息のため山に入るわれわれの自然との取り組みなど、何と贅沢な遊びにすぎないではないか。

■岩場に憩う

若かりしころ、八ヶ岳の赤岳から権現岳にかけての縦走路で突然、岩場の魅力にとりつかれた。径を外れて適当な岩棚に上がり、堅固な岩肌に体を預ければ、ふしぎなほどに心の安息を得たことを思い出す。岩場で日向ぼっこをする人を山屋はトカゲという。岩にしがみついている人は岩ジラミである。歩きつかれた体を岩場で一息入れるだけで大きな休息になることを、たいていの山屋は知っているだろう。

あの時以来私も、そんなことを思いながらトカゲを決め込み、岩ジラミになるのが好きになった。岩壁や露岩は地球の骨だから、地球の皮膚にすぎない普通の山の斜面とはちがった独特の感触をもっている。それは登山者という幼児にとっては父親の背中であり、母親の懐なのだ。私はその感触が欲しいとき、わざわざボサをわけても岩場に立ち寄り、贅沢なひとときを過ごす。トカゲを決め込むことはズルを決め込むことでもあるが、なにがしかの命を賭けることでもある。

■星と道徳

山小屋に泊まっても野宿でも、山で夜を迎えた時は、晴れてさえいれば必ず満天の星空を眺めるのがこの上ない楽しみである。その感激は、都会や平地の夜空に星を数える時とは比較にならない。精神的に醇化され深化されているからである。そして、いつもあの碩学カントの有名な言葉を思い起こす。

考えれば考えるほどますます驚異と畏敬の念をもってこの心を充たすものが二つある。わが頭上に輝く星空、そしてわが胸の内なる道徳律。

神秘の星空と道徳律。この二つは遠く両極に隔てられた命題と思われがちである。その考え方の当否は別として、この二つは常に並列して比較し、あるいは同化させて瞑想、思考の対象となる。またそうするべきものである。カントも、右の言葉に続けて

余は両者を直接にわが生涯の意識と結合させる。

と言っている。

山と医療・中島道郎

1993年制定 UIAA 医療委員会公認基準について(5)

第2編・登攀時における血液媒介伝染病の人から人への伝播

第2章　エイズウイルス(HIV)および B型、C型肝炎ウイルス(HSV,HCV) 陽性クライマーの問題

HIV 陽性者は、岩壁登攀のように無理なスポーツはしないほうがよい。それは、出血する機会や皮膚と皮膚が接触する危険の度が高い上に、身体を激しく動かすこと自体、免疫力を低下させるといわれているからである。

しかし、いろんな理由でHIV陽性クライマーを差別するようなことがあってはならないと我々は考えている。前章に書いたように、その注意を守ってさえいれば感染は起こり得ず、差別する必要は全くない。

そもそも、クライマーたるもの、登攀は危険なスポーツであり、怪我はつきもの、感染して死ぬこともある、くらいの覚悟はなければならない。それを踏まえた上で、予防措置をとるもとらぬもすべて個人の責任である。我々の意見としては、登攀中にウイルス感染予防対策を特別に配慮せねばならないような人は存在しない。ただし、救助隊員はウイルス病の危険性と血液を介する伝染病に関する一般的な知識、ならびに、その適正な対処法について熟知しておくべきである。

知っておくべき一般的知識の中でも最も大切なことは、**手洗い、防御用衣・手袋、消毒・滅菌、清拭、予防接種、そして適切な補助知識**である。

優れて大切なことは、カニューラの扱いとか、先のとがった道具（注射針、メスなど）の扱いには経験と習熟が必要である、ということと、その尖った先をそのまま捨てるのは危険で、必ず使い捨て用の鞘に納めて捨てなければならないが、その際に慌てて指を刺したりしないよう、細心の注意を払うこと、ということである。

口移し人工呼吸には、口と口が直接接触しないように工夫した人工呼吸マスクがあり、挿管とか吸引の操作には、口を遮蔽する板とか目を護る眼鏡などがある。場合に応じて適当な道具を装着すること。

図書紹介

カット　中村あや

上野英世・著『森を楽しむ』

森や樹のこと、キノコ、草のことを知りたい―登山の楽しみを増やすために、という人が多くなってきている。本書は、このような人々の願いにかなう本である。

「はじめに」の章に、森林の生態分布、遷移と極相など、森を勉強するためにぜひとも必要な基礎知識が、大変分かりやすく書かれている。本論は、「樹木」「山菜」「山草」「キノコ」「再び樹木」の五章に分かれ、登山の道すがら、よく目につく植物数十種類について興味深く解説している。

これから森の勉強をしたいという人にはよい入門書である。著者は日本山岳会会員。

一九九四年　淡交社刊　二二三ページ　二、〇〇〇円

（伊藤　敞）

Steve Dean・著 Hands of a Climber a life of Colin Virkus

著者は英国リバプール生れ。長じて週末にはウェールズの山々に日参し、岩稜などにたくさんの新ルートを開拓した。一九三三年、第四次エベレスト隊の候補となるが、同年ガンゴトリー山塊で画期的なアルパインスタイルでのヒマラヤ登攀に成功している。

氷雪のスノードンの夜間登山を楽しみ、ご来光の素晴らしさにひかれたが、第二次大戦と共に英空軍に入隊。皮肉なことにこの夜間登山のルートファインディングの経験をいかしたのか、真冬に爆撃機の夜間ナビゲーターとして参戦中に三十二歳で不帰の人となった。"Let's Go Climbing"五十年後の今も山のバイブルとして評価されている彼の著書を読みたいものだ。

一九九三年　The ERNEST PRESS 刊　二七八ページ　£15 95

（南井英弘）

益田幸郎／益田晴子・著『カナディアンロッキー ハイキング案内』

カナディアンロッキーとコロンビア山脈の山を五つのブロックに分けて、四十の主要ハイキングコースとその他十四のハイキングコースを紹介している。五つの地域の概略、コースの起点となる町の案内、それぞれのコースには歩行距離、歩行時間、登山口標高と最高点の標高、コース難易度、地図名がまず記され、一目でその大要がつかめるようになっている。写真の数も多く、コースの雰囲気がわかりやすい。

巻末には山小屋案内、その他の資料、アドバイスなども細かく親切に載っているので、実地計画を立てるのにも大変便利で利用価値が高いと思う。

著者はJAC会員、カナダ山岳会会員であり、カナダ在住二十余年、現地には大変詳しい。

一九九四年六月　山と溪谷社刊　B5判　二二三ページ　三、九〇〇円

（渡辺玉枝）

山形大学・コーボルト会 シルクロード学術登山隊・編『コーボルト ―コクセル峰初登頂特集―』

一九九三年八月、山形大学・コーボルト会（旧制山形高校・山形大学山岳部OB会）の学術登山隊（総隊長川上隆・本会会員）は、中国・新疆ウイグル自治区・コングール山群の未踏のコクセル峰（六七〇五メートル）に登頂したが、本書はその登山記録である。

内容は亀井英二登山隊長の「単眼遠征記」、各隊員による「登頂記」「担当報告」などの登山隊報告と、岡田尚武学術隊長（山形大学理学部教授）らの学術隊報告に分かれる。後者には本会会員の笹野雅史（カラクル湖畔キルギス遊牧民の集落と学校）、伊藤敞（天地とチャクラギール北麓の森林）の二氏も執筆している。

カシュガルをはじめ、この方面に行かれる方々には貴重な情報を提供してくれよう。全ページに豊富なカラー写真が使われ、眺めるだけでも楽しい。

一九九四年四月刊　A3判　九六ページ

照会先　コーボルト会事務局／山形

壮大なる"世界の屋根"を空から見る!!

空撮ヒマラヤ

写真=大森弘一郎

エヴェレスト、ローツェ、マカルーなどの8000メートル峰をはじめ、ネパール・ヒマラヤの著名峰を、自作のワイドカメラで空から撮影。日・英・米・独・仏・印・台・韓との共同出版

●発売中／●定価4200円（税込）

■山と溪谷社■　〒105 東京都港区芝大門1-1-33／☎03(3436)4055

市小白川町一ー五ー五〇　古川国雄方

（小倉董子）

STACY ALLISON・著
BYOND THE LIMITS A WOMAN'S TRIUMPH ON EVEREST

ヨセミテ、ロブソン、マッキンリー、アマダブラム、コミニズム峰と登山実績を重ねるとともに、自分を振り返ったところ特筆すべき人生ではなかった。それ以後はアメリカ女性初の世界最高峰登頂者になることに執念を燃やし、ついに念願を果たした登山者による自叙伝的な登山記である。

前記の山行、まとまりのないエベレスト隊の失敗山行に続いて翌一九八八年登頂成功の物語に移る。

登頂メンバー発表後の隊員たちの心理状況と反応、自分がメンバーに指名された喜びと他隊員への気遣いなど克明に表現している。

四人でアタックに出てしばらくして全員に残された新品酸素ボンベが一本になっていることに気付いて、登頂継続か断念の判断を強いられるが、同行米人二人とともにくじ引きで勝者が単独でアタック継続に決定。くじ運にも恵まれ登頂に成功した。

フィックスドロープの使用料を徴収した米隊の一員として参加した彼女は、この提案、他隊の反応も詳述している。

ITTLE BROWN AND COMPANY
BOSTON刊　二一・九五ドル　二八二ページ

（南井英弘）

七時雨の自然と語らう会・編
『七時雨（ななしぐれ）の風』

「ふとしたきっかけで、そこを訪ねたのです。十六年前の夏の日……。初めての出会いからこれまで、その場所とこんなに深いかかわりを持つようになるとは思ってもみませんでした」

岩手県も青森・秋田両県境に近い七時雨山。北上川の支流染田川の源流・田代平を抱いたこの山は、宮沢賢治の作品に表現されるイーハートーブの地誌のなかの一つである。この山が好きで好きでたまらない人たちがただ一軒の山小屋・七時雨山荘を知り、ここを基地としてこの山を訪れるうちに、山と山麓一帯が大手資本によるスキー場開発の標的になっていることを知る。

はじめてこの山を訪れた人は「……と、とつぜん、目の前がぱらんと明るく開けたのです。絵本の次のページをひっくり返したときのようでした。ゆくてに、まぶしすぎる緑のパノラマが広がっています。略…青紫色のなだらかな緑を描いて列なる山々に抱かれるように、草原がゆるくゆるく起伏し、輝き渡っているではありませんか。略…『田代平高原ていうんですよ。あれが七時雨山……』案内の人のせっかくの説明もわたしの耳には上滑りのまま。うわっと走りだしたい衝動に駆られた……」。こんなに素晴らしい山肌に開発の手を絶対に入れてはいけない。こんな想いがこの会を作り、そして胸中を会報が語っている。

これまで発行された会報の中から選ばれた記事から構成されているが、七時雨のみならずイーハートーブのこと、津軽街道のことと、七時雨絶賛の書である。辛めの文章が一つもないのが気になるのが、環境保護の大切さと困難さを痛感した。ペンによるソフトな闘いぶりは見事。

一九九四年　白山書房刊　一五八ページ　一、五〇〇円

（山口俊輔）

書籍受入報告（1994年8月）

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入
渡辺千昭・他	空撮登山ガイド（新版）No. 5：東京周辺の山々	92pp／25cm	山と溪谷社	1994	出版社寄贈
内田修	空撮登山ガイド（新版）No. 9：槍・穂高・常念岳	92pp／25cm	山と溪谷社	1994	出版社寄贈
高見和成	雪の谷　山の声	347pp／19cm	悠々社	1994	著者寄贈
岡本康夫	自灯明：自伝抄	329pp／22cm	私家版	1994	著者寄贈
長崎幸雄	続・わが白山連峰	293pp／18cm	山路書房	1994	発行者寄贈
日本地図センター・編	地図利用マニュアル：学習者の発達段階に応じた地図指導の手引	68pp／26cm	日本地図センター	1990	武田満子氏寄贈
東北大学山の会・編	チベット高原の盟主ニェンチェンタンラ	281pp／22cm	第一法規出版（東北支社）	1994	発行者寄贈
沢野ひとし	休息の山	207pp／22cm	山と溪谷社	1994	出版社寄贈
建設省国土地理院・監修	地図記号のうつりかわり：地形図図式・記号の変遷	151pp／30cm	日本地図センター	1994	購入
臼田明	スキー開拓者・高橋良（史誌「信濃」No. 526, 531別刷）	23pp／22cm		1994	著者寄贈
小野訓、秋月岩魚・写真	フライキャスティング・マニュアル	222pp／26cm	山と溪谷社	1994	出版社寄贈
本郷次雄・監修	きのこ（山溪フィールドブックスNo. 10）	383pp／19cm	山と溪谷社	1994	出版社寄贈
大森弘一郎	写真集：空撮ヒマラヤ（壮大なる世界の屋根を空から見る）	108pp／24×28cm	山と溪谷社	1994	出版社寄贈
渓流フィッシング編集部	日帰り一泊で楽しめる東京周辺渓流釣り場ガイド	192pp／21cm	山と溪谷社	1994	出版社寄贈
Aamir Ali・編	Environmental Protection of the Himalaya	112pp／22cm	Indus Pub. Co.	1994	Mr. Kapadia寄贈
American Alpine Club	The American Alpine Journal No.68（Vol.36, 1994）	360pp／23cm	American Alpine Club	1994	発行者寄贈
The Himalayan Club	The Himalayan Journal Vol. 50（1992－1993）	267pp／22cm	The Himalayan Club	1994	発行者寄贈

INFORMATION

◆第十回宮崎ウエストン祭
・'94九州四支部合同晩秋山行の集い
・宮崎支部創立十周年の集いご案内

宮崎支部

日時　十一月三日　九時～九時四十分
場所　宮崎県西臼杵郡高千穂町五カ所
　三秀台ウエストン記念広場
行事・式典　献鐘と献花、山岳ミニ講話、山の歌合唱
●式典後、祖母山（一七五六・七メートル）登山＝自由参加
◇前夜祭
日時　十一月二日(水)　十七時～二十時
場所　ウエストン記念碑北側広場（農業改善センター）
行事　四支部懇談会、郷土芸能（夜神楽）、各種バザー、特産品展示即売、天体観測、キャンプファイヤー
●前夜祭参加者は、五カ所公民館宿泊を予定（十月二十日までに申し込んでください。寝袋持参、食費二、五〇〇円。参加料無料）
●連絡と照会先
宮崎支部事務局
〒八八〇　宮崎市大橋三―二六五（大谷優方）
☎〇九八五―二五―二五九四
高千穂町役場（総務課）
〒八八二―一一　宮崎県西臼杵郡高千穂町三田井
☎〇九八二―七二―三一八一

◆講演会「サガルマータ（エベレスト）」

高所登山研究委員会

日時　十一月十一日(金)十九時～
場所　日本山岳会会議室
演題　南西壁登攀のタクティクス
講師　尾形好雄（群馬岳連・一九九三年冬登攀隊長）

◆第三十一回マラソン大会

学生部

恒例の学生部主催・皇居一周マラソン大会を今年も開催します。
日時　十一月二十日(日)　小雨決行
・九時　集合・受付（皇居桜田門地下鉄有楽町線・桜田門下車）
・十時　男女団体戦（四人一チーム、一人皇居一周約五キロ）
・十三時　男女個人戦（男子・三周、女子・二周）
・十四時三十分　表彰式、のち閉会式（解散後打ち上げ）
連絡先　学生部委員長・後藤琢史
☎〇三―三三九一―一五四〇

◆平成六年度年次晩餐会

総務委員会

年次晩餐会を次の要領で開催します。昨年好評だったアルパインスケッチ展に続き、今年はアルパインフォト展を企画しています。
日時　十二月三日(土)　午後四時開場
　六時開宴
会場　新高輪プリンスホテル
会費　一五、〇〇〇円
●例年どおり十二月四日には親睦山行を企画しています。なお、詳細は十一月に会員各位に通知します。

◆第二十三回山岳史懇談会

図書委員会

日時　十二月八日(木)　十八時三十分
場所　日本山岳会会議室
演題　旧制浪速高校山岳部の山
講師　今西壽雄氏・徳永篤司氏

◆カトマンズでの個展案内

藤江幾太郎（会員番号七五九三）油絵展をカトマンズで開催します。作品は一九六八年から昨年までの六十点です。ご高覧ください。
日時　十一月十一日～二十四日
場所　カトマンズ・Babar Mahar のネパール芸術会議会館
●藤江幾太郎はニューバネスワールのホテル・サンセットビュー（P・O・BOX一一四七　☎二二九一七二―二一一五二四）に宿泊しています。

◆三人展―鈴木正俊（木版）・榎本進（油彩）・三宅次郎（油彩）―開催

山をテーマとした三人展も十回目を迎えました。
日時　十一月七日(月)～十二日(土)
　十一～十八時（最終日十六時）
場所　室町ギャラリー・中央区日本橋室町一―一三―一〇（松崎ビル一階）
☎〇三―三二四一―八九八八

会務報告

【委員会報告】

●総務委員会　①ルーム引っ越し管理（七月十六日、八月二十七日）②全国支部大会は十月十五～十六日、関西氷ノ山で行う。申込締切りは九月十五日③新入会員オリエンテーションは十月二十二日、ルームで行う。
●集会委員会　①ルームオープニングパーティー（九月三日）②リフォーム委員会（七月二十二日、八月三十日打ち合わせ、九月五日から新ルーム使用開始）
●資料委員会　①七月八日、故廣瀬潔氏の用具受入れについて打ち合わせ

②武井清会員寄贈の絵画「マチャプチャレ」を受領（七月十七日）、ルームに展示した　③七月二十三日、大迫町立山岳博物館と打ち合わせ　④八月十四日、二十一日、山研資料室の維持管理　⑤八月二十九日～九月三日、ルーム改装後の資料展示。

●**フィルムビデオ委員会**　年次晩餐会写真展の応募状況は九月六日現在で約二十五名、さらに増える見込み。

●**自然保護委員会**　自然保護全国集会（九月十七～十八日）の参加申込は約五十名、準備を進めている。

●**自然保護専門委員会**　①山の自然学講座第十五回を七月十六日、君塚、鹿野講師により行った。参加者四十六名　②同第十六回を七月二十八～三十一日、白馬岳で行った。講師は小泉・関口、参加者二十七名　③八月一～三十一日、山研に一名のインタープリターを常駐（六名が交替）し、一六一名を案内、まずまずの好評だった。

●**図書委員会**　①第二回山の本シリーズ「山日記の一生」十月二十一日　②第二十三回山岳史懇談会「旧制浪速高校山岳部の山」十二月八日　③第二十六回山岳図書を語る夕「島田巽と山」仮称、三月下旬。以上の催しを企画している。

◆八月ルーム来室者125名

投稿原稿についてのお願い

会報編集委員会

◆**投稿原稿についてのお願い**

会報「山」の編集につきましては、会員の皆様からご支援をいただき、おかげさまで順調に発行を続けております。いっそう面白く、読んで楽しい会報にするためにも、皆様の山紀行、随想など、原稿を編集委員会までお寄せください。記事のテーマその他、会報に対するご意見、ご要望も併せてお寄せください。

なお、編集業務をさらに円滑にするため、ご寄稿になる原稿について、次のことにご配慮をお願いいたします。

一、原稿の書き方

①十七字詰め、縦書き（ワープロ原稿のときも同様）。

②用字は常用漢字、現代仮名遣い。

③人名、地名など固有名詞の漢字はとくにハッキリと。必要に応じてふり仮名を付ける。

二、原稿の長さ

「報告」「東西南北」欄などは、十七字詰めで、五十～八十行程度、六十二行（二段分、見出し五行を含む）が標準です。なお、割り付けの都合で縮めることがあります。ご了承ください。

三、「図書紹介」の原稿について

①図書委員会（細井澄子委員）経由でお願いします。直接編集委員会に送られてくると、重複することがあります。

②ルールは、図書委員会で図書の選定→執筆依頼→原稿は図書委員会へ→編集委員会送付となっています。紹介したい本がありましたら、図書委員会にご相談ください。

四、原稿の締切りについて

発行日（毎月二十日）の四十日前、例えば十月号に掲載の場合は九月十日が締切りです。とくに会合などのお知らせは、開催日に気をつけてください。割り込み原稿は、すでにレイアウト済みの他の原稿に迷惑をかけます。

五、原稿の送り先

必ず左記へ。山岳会事務局に送る方がいますが、事務局から転送になり、その分遅れます。

〒二七七　柏市豊四季六四六－一五七
伊藤　敞あて
TEL・FAX　〇四七一－七四－一一〇三　急を要する場合は、

〒一六七　杉並区松庵三－一七－五
奈良原町子あて
TEL　〇三－三三三四－八一一二
FAX　〇三－三三三四－八一一三

■**訂正**　「山」九月号、十四ページ三段一行目シンポジウム「山と疲労」は「登山と疲労」の誤りでした。お詫びして訂正します。

日本山岳会会報　山　593号

1994年（平成6年）10月20日発行
発行所　社団法人日本山岳会
〒102 東京都千代田区四番町5－4 サンビュウハイツ四番町
TEL 東京（03）3261－4433
振替口座　東京3－4829
発行者　藤平正夫
編集人　伊藤　敞
印　刷　株式会社　双陽社